

## 巻 頭 言

東京女子医科大学病理診断科

ニシカワ トシオ  
西川 俊郎

東京女子医科大学には、1978年に循環器小児科（高尾篤良教授）に入局して以来、1981年に第二病理学教室（梶田昭教授、笠島武教授）、1996年より病院病理科（現・病理診断科）に在籍し、本年（2014年）3月に退任するまで36年間お世話になり、多くの先生やスタッフに支えられながら勤め上げることができた。

病理診断科は、その前身の病理部が中央検査部の一部門として1963年に設立され、1979年に病院病理科となり、平山助教授が部長に就任（1989年より教授）、1990年より河上教授が就任し、1996年に転出後、同年に私が第二病理学教室より着任した。2008年の厚生労働省の指針により診療科としての標榜が可能となり、本学でも診療部門の1つとして病理診断科を設置することになった。初代の診療部長に私が就任することになり、このときから中央検査部の一部門から独立して診療科としての「病理診断科」が発足することになった。

病理診断科では、「診療」に該当する主な業務は、日常診療で各科から提出される手術検体、生検検体、細胞診検体の「病理診断」であり、私と増田昭博准教授、山本智子准教授、板垣裕子助教、川西邦夫助教のほか、第一、第二病理学教室および統合医科学との兼任病理医、病理診断科の非常勤講師の各病理医が担っている。長い間、中央の病理部門とは別の個々の部門で診断されていた、脳神経外科標本、腎センター生検標本、婦人科細胞診標本も病理診断科の病理医が関与するようになり、病理システムによって共通のファイルで統合され、全学的な病理診断が統一化されるに至った。この統一化も多くの先生方の不断の努力があってこそ成し得たものであり、ぜひ大切にしていってほしいと願わずにはいられない。

巻頭言を書くにあたり、関連の各先生方やスタッフに感謝の意を表するとともに、今回寄稿して下さった方々に深く御礼を申し上げ、病理診断科の今後のますますの発展を祈念したいと思います。